

**実質的アクティビティの会話における話題展開と談話技能の分析**  
—日本語の母語話者と非母語話者が参加するキャンパスツアーでの会話の分析をもとに—

早稲田大学  
中井陽子

**1. はじめに**

大学のキャンパスツアーという実質行動に焦点を置いた「実質的アクティビティ」（村岡2003）の会話における、1)話題展開と、2)聞き手・話し手の言語的・非言語的な談話技能を分析する。

**2. 調査方法・被験者**

録画・分析した会話データは、キャンパスツアー会話1（約60分間、ギリシヤ人男性の初級日本語NNS 1名と女性NS 1名）と、キャンパスツアー会話2（約60分間、男性NS 1名と女性NS 1名）であった。

**3. 結果**

分析の結果、NNS/NSの会話とNS同士の会話の特徴の相違点は、以下の通りであった。

- 1) どちらの会話も、建物や看板など、目の前の意外性のある視覚情報が刺激となり、それに言及する「現場性の有る発話」で話題が開始していた。そのため、唐突な話題転換が頻繁に起きていた。
- 2) どちらの会話も、現場性の有る発話には「こ系」などの指示表現と指示的ジェスチャーが多く見られた。
- 3) どちらの会話も、「現場性の有る発話」から「現場性の無い発話」で話題が展開していた。具体的には、NNS/NSの会話1では、ギリシヤや日本の文化について語るなど、より異文化を扱った話題が多く見られ、一方、NS/NSの会話2では、子供の頃の思い出などの「現場性の無い発話」で発展している話題が見られた。
- 4) NNS/NSの会話1でNNSは、NSの説明を聞き返しても理解できなければ、あきらめて次の話題に移るといふ談話技能を用い、一方、NS/NSの会話2でNSは、騒音で聞き取れなかったり、周りの物に注意を奪われて話を聞いていなかったりしても、あいづちのタイミングをうまく合わせるという談話技能を用いていた。
- 5) どちらの会話も、「現場性の有る発話」や「現場性の無い発話」を用いて話題を作り、沈黙を回避するという談話技能が用いられていた。ただし、NNS/NSの会話1では、NNSは、日本語の聞き取りに自信がないため、自国の文化に関する得意な話題を積極的に提供するという談話技能を用いていた。

**4. 考察**

以上の分析結果から、キャンパスツアーなどの屋外で行われる「実質的アクティビティ」に、学習者が参加する際に必要となる談話技能の教育の可能性について考察する。

**参考文献**

村岡英裕 (2003) 「アクティビティと学習者の参加-接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために-」 宮崎里司/ヘン・マリット (編) 『接触場面と日本語教育 ネウストプニーのインパクト』 245-259, 明治書院

## 用語リスト

**実質的アクティビティ**: 日常生活の活動で、スポーツや料理など、言葉以外の実質活動のルールによって成り立つもの。